九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

漫画研究への扉

日下，翠
九州大学大学院比較社会文化研究院

南雲，大悟
國學院大学・二松学舎大学・日本大学非常勤講師

アンカナー，ジラジランチャイ
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

佐島，顕子
福岡女学院大学人文学部現代文化学科

他

https://hdl.handle.net/2324/16791

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2005-09-20．梓書院
バージョン：
権利関係：

第3部　中国漫画評論

翻　訳：間　ふさ子

1. 憂慮される日本マンガの出版ブーム
周 慧 林

2. 不振を打開しよう
李 運 江

3. 児童読み物繁栄への重要措置
唐 斯 復

4. 飛躍が待たれる中国マンガ
邢 宇 皓

5. 中国のマンガは何がネックなのか
楊　鵬

6. マンガ　最も取るに足らない芸術
BENJAMIN

この第3部では、漫画文化をめぐる中国国内での評論を幾つか取り上げる。1995年の国家的漫画振興計画「5・15・5」プロジェクト始動から現在に至るまで、マンガはいったいどのように論じられてきたのか、その移り変わりを時系列に追ってみたい。

1980年以降、日本やアメリカの「ストーリーマンガ、アニメ」が中国に輸入されると、圧倒的な質の高さから、爆発的な需要が起こり中国市場を制してしまう。国内同業、特に旧タイプの「ユーモア諷刺漫画」などは商業ベースでこれに全く太刀打ちできなかった。

その後、新しいタイプのマンガ作品に魅入られた多くの人々はその享受に甘んじるだけではなく、同人誌などで自身らの創作を修練する。その流れが90年代半ばに月刊誌『画書大王』という形で「国産雑誌」を成就させる。こうした活動はマンガ先進国との差を埋める勢いを得て、国内外のマンガ作品・出版が隆盛する契機となった。しかし、これと同時にマンガに潜む「ポルノ・暴力」や「海外作品の海賊版」などの問題が注視されるようになる。

この時期に発表されたのが1. 周慧林「憂慮される日本マンガの出版ブーム」である。文中、中国共産党中央宣伝部に所属する著者は日本を含む国外のマンガがもたらす罪悪などを述べた上で、中国的マンガ出版事業の健全な繁栄と発展には「国内の出版管理部門の共同作業」が必要であると説く。「5・15・5」プロジェクト始動を目前に控えたこの時期に、法案作成の参画者であった人物による、読者層に業界人を多く含む『中国図書評論』「書界焦点（出版業界の焦点）」への投稿は、プロジェクトに先立つ「前書き・導入部分」として十分な役割を果たしたのである。また、同時期の2. 李運江「不振を打開しよう ―日本マンガの洪水から中国マンガの奮起を呼びかける」においても日本マンガの悪影響が例示されている。評論掲載雑誌『漫画月刊』は1985年創刊で、今尚毎月18万部の部数を誇る「ユーモア諷刺漫画」の老舗であるが、著者の李運江

（現・中国河南省書画院院長。専門は伝統的中国画）は、旧派の特徴とも言える「日本マンガ叩き」に偏向せず、日本マンガの長所も認めた。また、中国マンガの発展の道を示唆すべく、漫画家の経済的問題や育成にまで触れている点は貴重である。そして、ついに「5・15・5」プロジェクトが始動する。マンガ界はその計画に注目し、政府が推進する「国内産業の保護と発展の両側面からの強力なバックアップ」に、期待を高めるのであった。実際、全国各紙の「5・15・5」関連記事には少しの不安も述べられていない。3. 唐斯復「児童読み物繁栄への重要措置　動画図書出版『5155』プロジェクト始動」は、上海の社会・文化一般の地方紙『文匯報』（香港にも同名の新聞あり）に発表され、ただただ中共中央宣伝部・新聞出版署の策定した概要を報じている。

今尚、中国メディアは政府の統制下にあるが、当時より「指導者動向・国策中心」の報道から、「国民や企業が関心を持つテーマ」へと多様化していた。しかし、当時の「5・15・5」をめぐる各種報道は無批判的に取り上げられており、「多様化」の表出というよりも従来型報道に組み込まれていた観が拭えない。プロジェクト始動前後においては、「5・15・5」の基本政策を支持した上で、独自のマンガ文化を形成しようという意見が大半を占める。

しかし、プロジェクト始動から5年、その成果の無さが見えてくる。4. 邢宇皓「飛躍が待たれる中国マンガ」は知識人向けの新聞で教育・文化関連の報道が充実した全国紙『光明日報』（発行部数：33万部）に発表された。本論では実施5年を経た後に明確になった各種問題点が整理されている。基礎土台作りをやっと終え、プロジェクトによる雑誌社・創作拠点などの「ハード面」は備わったが、現在そのソフトや戦略の面でハードルを越えていないと指摘。また、5. 楊鵬「中国のマンガは何がネックなのか」は、自身が作家であり、中国社会科学院で児童文学・文化やマンガを研究している楊氏が地方紙『北京日報』に投稿したものである。彼は「5・15・5」以降も中国マンガがなぜ脆弱であるのかを、中国

国内の問題点について極めて冷静な分析をした。また、彼は新しいマンガと接する際に目立った従前の「陳腐な偏見や古臭い思考」を捨て去ることを訴え、「メディア＝宣伝・教化の工具」という呪縛を解き、作品自体を成長させよと提言する。

上述の評論1. 2. はタイトル通り、「日本」という「文化侵略者」への敵視がやや前面に出ているが、評論4. 5. においては、「5・15・5」から5年の歳月を経て、「日本・マンガ」という外的要因に責任を転嫁せず、「自己及び自国文化の不振」という現実問題と対峙できる心的成長を遂げた。

最後に取り上げる新世代の代表意見が、総合芸術誌『芸術世界』に掲載された6. Benjamin「マンガ　最も取るに足らない芸術」である。本論は新しいマンガの創作に携わった者による新鮮な視線から、独特の筆致で語られる。そのせいか、中国の「新しいマンガ」の世界に身を置く実践者たちの困難な状況やストレートな感情がひしひしと伝わってくる。彼らは中国マンガ成就のため、旧漫画との訣別・日本マンガを分析する…など、その独自発展に向け、より具体的な方策を提示している。

日本マンガの大量流入・接触を経て、大いに影響を受けた新世代は今、従来の伝統的諷刺漫画に求められた「民族文化主義」や「人民に奉仕する」という形ばかりの概念化に対して、「最も取るに足らない」と自嘲しながらも（そう称することで、逆に対抗文化としての強みを際立たせたのか？）、地力を蓄え、自分達の「特色あるマンガ」を自由に模索し続けているのである。

（南 雲 大 悟）

○掲載評論文は、研究代表者　日下みどり『中国漫画評論』（平成13年～平成15年度科学研究費補助金（萌芽的研究）成果報告書　課題番号13610690）より引用しており、翻訳は間ふさ子氏によるものである。

1. 憂慮される日本マンガの出版ブーム

『中国図書評論』1995年4月　周 慧 林

数年来我が国のマンガ読み物出版には新たな現象が出現している。それは『電脳機器人』、『漫遊科学世界』など少年・児童に喜ばれるマンガが出版されたことに限らない。マンガ雑誌も新たな一面を呈し始めた。とはいえ、最近図書市場では日本マンガの出版ブームが起こっている。関係部門の統計によれば、北京市場だけでも日本のマンガ類は、『うる星やつら』、『月』、『聖伝』、『キャプテン翼』、『ナイルの娘』、『電脳警察サイバーコップ』、『聖闘士星矢・勝利の女神』、『セーラームーン』など100点近くある。これらが市場に登場する際の特徴は、勢いが猛烈である、品種が多い、規模が大きいなどの特徴がある。短時間にこれほど多くの種類が登場し、しかもほとんどが数巻、十数巻、数十巻からなるシリーズものである。現在目にするもののうち最多は『ドラゴンボール』の75巻である。上海や広州などの図書市場も北京に似たような状況だということだ。

出版界、教育界の多くの人々がこれに対して憂慮を感じているのは道理である。なぜならこれら日本マンガの出版は、より多くの人のマンガへの興味を育て、児童少年の視野を広げ、知力を開発するのに役立つが、マイナスの作用もはっきりしているからである。

第一に、日本マンガの多くが、暴力、妖怪、迷信、サスペンス、ホラーといった内容を含んでおり、これらはすでに良くない影響を及ぼしている。上海の『文匯報』掲載のある文章には以下のような情景が描写されていた。「上海では、身近にいる子どもに注意して見ると、かれらが遊ぶときに、木の棒や『宝剣』を振り上げてちゃんちゃんばらばらとする

のを好み、『皆殺しだ』、『殺してやる』、『宇宙を征服するぞ』などと叫んでいることに気づくだろう」

さらに劣悪なものもある。それらの本は刺激を求め、ヌードの画が多数混じり、裸の男女が抱き合ったり重なり合ったりしている場面もある。男女のセックスを描いた本すらあった。明らかな色情的描写はないものの、少女が恋に目覚め、男が女を襲い、男の子が女の子を追いかけ誘惑するといったストーリーもある。その中の一冊は、超能力を持つ男子学生が女子学生とキスをして占いをするのである。品も悪いし荒唐無稽なばかばかしい話である。

そればかりではなく、これらの漫画に描かれた「日本的容貌」やそこに流れる日本的「味」は、少年・児童に対する我が国の優れた民族文化の影響力を薄めてしまうおそれがある。

次に、少なからぬ作品が成人化している。少年や児童の閲読心理に反し、作品中の人物の対話や心の動きはいずれも大人のものであり、児童向け読み物と銘打ちながら、子どもにはわかりにくい。分析によれば、中には日本ではおそらく大人向けのものもあるにもかかわらず、一部の出版社が何の区別もつけず、すべて児童向けとして出版してしまうらしい。

マンガの絵や印刷が非常に低劣なものもある。また字や注音の間違いも非常に多く、画面の作りが極めて粗雑で、あるものはA4判の1頁に10コマ以上詰め込まれ、字が豆粒のように小さい。これらは子どもが読むのにふさわしくない。

第三に、日本マンガの出版ブームは、我が国で育ちつつある国産マンガ市場にとって大きな打撃となっている。日本は広大なマンガ読者群を擁しており、ある程度の発行量を持ち、経済的にも利益を上げている作品が多いため、我が国に入ってくる際の印税を低く抑えることができる。一方我が国のマンガは目下育ちつつある時期にある。よって、こういった勢いは国産マンガの創作や出版を抑えることになりかねない。

第四に、海賊版の問題が我が国の知的所有権保護のイメージを損なっている。

このような現状において、我が国のマンガ創作や出版そして管理部門は厳しい現実にいかに対処すべきだろうか。私は以下のように考える。

まず、プラスを採りマイナスを捨てるべきである。日本のマンガが我が国でブームとなりえたのは、我が国に市場があり、日本マンガに時代の息吹、豊かな創造力、強烈な動感、巧妙な誇張などの「人より優ったところ」があることを示している。また友情を重んじることや科学知識など、思想や内容的にも取るべきところはある。よって優れた作品を選んで適切に出版することには何ら問題はない。だが何も区別せずに大量に出版してはならない。内容が不健全なものは断固出版すべきではない。

第二に、我が国の新型連環漫画作家の陣営を固め、育てることが大事である。ここ数年、我が国の漫画は長足の発展をとげ、漫画の書き手たちは芸術的修養や表現技巧の方面で一定の水準に達しており、佳作を生み出す実力を備えてきた。だが人材の流失もひどく、多くの人がアメリカや日本で作画技術者になっている。そこで書き手の陣営を固めると同時に、さらに多くの創作人材を育て、彼らのために良好な創作環境を整え、力を発揮できる場を与え、彼らの創作に対する積極性を発動させる必要がある。

また、漫画市場を育て開拓することにも意を用いるべきである。日本では、マンガの創作、出版、発行は良性循環を形成しており、そのために「マンガ王国」となりえたのである。その良性循環の重要な要素は第一に読者が多いこと、第二に生産量が多いことである。我が国のマンガの主要な目標は、さらに多くの少年・児童を引きつけることと成人マンガ市場の開拓を重視することであろう。

最後に、出版管理部門は管理を強化し、色情や暴力その他の良くない傾向がまじったマンガを入れないようすべきである。目下のところは、

中央宣伝部、新聞出版署が1994年下期に出した「『全国少年児童読み物出版工作座談会紀要』の転送に関する通知」の精神を真剣に貫き、少年・児童向け読み物専門ではない出版社が大量にマンガを輸入して出版している傾向を是正し、若い世代に対して、また我が国のマンガ事業の繁栄に対して責任をもつことが必要である。

関係各部門と同志たちが心をそろえて協力し、マンガの出版とテレビアニメの制作・放映とを緊密に結合させれば、我が国のマンガ出版の健全な繁栄と発展のメカニズムを築きあげることができる。そうすれば国産マンガが国内市場において主導的地位を占め、さらに外国市場に進軍することも可能になる、と私は考える。

2. 不振を打開しよう
—日本マンガの洪水から中国マンガの奮起を呼びかける

『漫画月刊』1995年10期　李 運 江

街の本の露店をひやかすと、美しく印刷された日本マンガが図書雑誌文化市場にあふれ、強烈な視覚的衝撃力で中国の読者を招き寄せている。それにひきかえ中国マンガは、印刷の美しさからも、品揃えの点からも頼りなく無力に見える。このような押しつけの状態では、我が国の青少年読者も選択の余地なくこの投げ売りを受け入れるしかない。国の最高指導者たちがあちこちでこの憂慮すべき問題に触れるのも無理はない。

日本ではマンガは非常に普及しており、幼児向けの読み物から新聞雑誌まで、教科書にさえもマンガが使われている。商品の広告やパッケージにもマンガを使って製品の性能や使用方法を説明しており、面白くて分かりやすい。日本の文化はすでに「マンガ化」されているのである。

我が国では、初期の漫画は諷刺という特徴を大きく持っていたため、主な発表場所は新聞であり、一種の武器として政治に服務するものであった。漫画は槍や匕首の役割を果たしていた。改革開放の春風はマンガを充分に発展させ、人の気分を和ませるユーモア画や文学性を持った連環マンガ、哲理マンガ、市井マンガ、広告マンガなどが新聞雑誌に登場してきた。その機運に乗じてマンガ専門の雑誌も生まれ、人々の文化生活を豊かにし、マンガそのものを大幅に進歩させていった。

ある陣地をこちらが占領しなければ、他人が占領するのは当然である。そこで先に触れた日本マンガが中国市場にどっと流れ込むという現象が起こった。この現象にプラスの面があったことは否定できない。それは我が国のマンガ市場ならびに子どもたちの精神の領域を穴埋めし充実させたことである。これは同時に我が国のマンガ事業に対する挑戦でもあり、我が国のマンガ家たちの責任感や愛国精神を奮い立たせることができた。だがマイナスの面も大いに存在する。これら外来文化の影響のエネルギーを甘く見てはいけない。子どもの判断力には限りがある。彼らは「黄に染まれば黄、青に染まれば青」くなるのだ。彼らの好奇心や問いかけに満ちた目には拒絶するものはなにもない。暴力を以て暴力に代える激闘や、くっついたり離れたりの恋愛が子どもたちにもたらすものは、健全で向上的な精神の糧では決してない。未来は子どもたちの世界である。だが彼らに奥深い歴史や文明を引き継ぎ、中華民族文化の価値に対する一体感や民族の誇りを持たせるのは、我々大人の責任である。もし私たちが優秀な民族文化と現代科学という栄養を子どもたちに与えず、彼らが舶来文化の海と価値体系の中で成長するに任せれば、数年後には私たちに屈辱と後悔を残すことになるだろう。歴史を誤り、ある世代の人々の前途を誤らせるような結末は、まともな中国人であれば誰も見たくはないはずだ。外国マンガがのさばっている現状に対して、心あるマンガ界や出版界の人々は、自らの歴史的責任と崇高な使命をきちんと認識し、金銭や利潤だけを目指す間違った場所から離れて、視野

を広げ、より一層すぐれた精神の糧を創作・出版し、少年・児童に提供すべきである。

マンガ家はまず自らの伝統的観念を変えるべきである。外国の先進的なものを学ぶことに長けねばならない。日本のマンガを例にあげれば、彼らはマンガの娯楽性を重んじている。これは学ぶべき点である。昨今の効率化高速化した仕事や生活のテンポの中、人々は余暇に冗長で重い作品で疲労することを好まなくなり、軽く楽しい娯楽性の高い作品こそ人々が自然と必要とするものとなった。これらの作品はわかりやすく、親しみやすい。もちろん、思想性の強い、時弊を糾弾する作品が悪いと言うのではない。ここで強調しているのは、それを基本として、その基礎の上にマンガの機能を拡大し、社会のニーズに合わせるべきだということなのである。我が国の画家たちは作画のテクニックであれキャラクターデザイン能力であれ、いずれも日本の画家に劣ってはいない。だが、だからと言って他者の長所を学ぶチャンスを放棄してはならない。そして、日本マンガの舶来は私たちに新鮮な感じを与えた。彼らはテレビ制作の際の、コマ割り・ズームイン・大透視など映像的な画面処理の手法を採用しており、テレビを見慣れた子どもたちはあっさりそれを受け入れた。これはまた中国の画家たちに対しても、一つの画面はいずれも完全な独立した構図を持たねばならないという伝統的な描き方の再認識を迫るものであった。これらは結局は時代とともにやってきた新しいスタイルである。頑固に昔ながらの方法を守り、読者の閲読心理や視覚心理をつかもうとしないのでは、我々の作品に出口はない。何も外国の作家たちの風格を真似ろといっているのではない。自らの位置を見出して時代にマッチする作品の形式を創り出し、読者を獲得すべきだということなのだ。

次に、経済効果を重んじることも雑誌や出版部門の生死存亡に係わる大きな問題である。よって市場とのリンクは早速解決すべき問題だ。同時に作者の労働価値の問題も無視してはならない。原稿料制度の改革は

すぐになされるべきである。ここ数年来、実力のある中年・青年作家たちが創作に注ぐ力を他に移しているのは何故か。その原因はいろいろあるが、最も大きいのは、構想から制作を経て作品の完成まで、推敲を繰り返し、数十回も訂正し描き換える、その労働と発表後に与えられる報酬とが正比例していないことである。これは当然作者の創作意欲にも影響を与える。この問題をきちんと解決できなければ、今後作者陣の流失と老化を招くであろう。

また、我が国の作家たちはほとんどが「正規軍」ではない。マンガ自身の特徴により、美術系大学でマンガ学科を開設しているところはまだない。これは作品不足の盲点の一つである。マンガの専門学科を設けることは本当にできないのであろうか？ 河南省のマンガ界の同志が力を合わせ、鄭州大学新聞系にマンガ専攻クラスを設けたことがあったが、これは喜ぶべき効果を収めた。だが残念ながら持続できなかった。創作者が散在していては大きな勢力にはなりえない。ほとんどの作家はそれぞれの場所で余暇にマンガ創作を行っており、日本のように大量のプロのマンガ家が存在することは不可能なのである。その結果、マンガ技術の研究が進まず、従って創意やキャラクターがきちんと立った光り輝く秀作が生まれてこない。観念の転換、これは事物の発展の根本である。我々の教育部門が観念を転換させ、天下に先がけてマンガカレッジを開校することはないのか？ もしそれができれば、マンガ事業の前途は輝かしいものになるだろう。

3. 児童読み物繁栄への重要措置

動画図書出版「5155」プロジェクト始動

二三年のうちに児童動画図書出版基地を5カ所建設し、児童シリーズ図書を15組重点的に創作出版し、児童動画雑誌を5誌軌道に載せるよう努める

『文匯報』1995年12月15日　北京駐在記者　唐 斯 復

中国動画図書出版「5155」プロジェクト始動座談会が本日北京で開かれた。このプロジェクトは少年・児童向け読み物の出版を繁栄させるための重要措置であり、浙江人民美術出版社がトップを切ってカラーマンガ『中華少年奇才』（上下）を出版した。

江沢民総書記、李鵬総理は優秀な少年・児童向け作品を積極的に創作、制作することに対し熱のこもった激励と肯定を与え、広範な文芸工作者、出版工作者が党の文芸方針の指導のもと、少年・児童の健全な成長に配慮して、思想性・芸術性・鑑賞性が高レベルで統一された動画の佳作を創作し続け、少年・児童のために更に多くの更に優れた精神の糧を提供して、我が国独自の動画のヒーローを少年・児童の手本・友達としてほしいと希望した。

江総書記と李鵬総理の指示を実行するため、中央宣伝部と新聞出版署は、突っ込んだ調査研究を行い、専門家の意見を広く求めたうえで、全国児童動画図書出版「5155」プロジェクトを策定した。これは、二三年のうちに全国の創作・編集・出版・発行の力を動員し集中させて、児童動画図書出版基地を5カ所建設し、児童シリーズ動画図書を15組重点的に創作出版し、児童動画雑誌を5誌軌道に載せる。そして全国の児童動画図書の出版の繁栄をリードさせ、中国の広範な少年・児童のニーズ

を満たそうとするもので、「5155」プロジェクトと略称される。第9次五カ年計画の後半期には中国児童動画図書の創作・出版を国際的な水準にまで近づけるかあるいは到達させ、国際市場と軌道を接して、中国の特色を備えた児童動画図書の中国市場独占を実現させ、世界に歩を進める。そうすれば、ここ数年自己制作が少なく動画図書市場が外国もので占められるという望ましくない局面をようやく変えることができる。そして少年・児童が好む動画読み物の形式を利用して21世紀へつながる後継者の資質を高めるという社会の要請を貫徹させねばならない。

現在、5つの出版基地のうち京津基地、上海基地、広西基地はすでに始動し、15組の重点動画図書のうち浙江人民美術出版社の『中華少年奇才』と広西接力出版社の『神脳聡仔マンガシリーズ叢書』がすでに出版され、残りの13組も大部分が具体化の段階に入っている。児童動画雑誌5誌のうち、北京出版社の『北京卡通』と中国連環画出版社の『少年漫画』が今年10月に創刊された。人民美術出版社の『漫画大王』、中国少年児童出版社の『中国卡通』、少年児童出版社（上海）の『卡通先鋒』も来年初めには読者にお目見えする予定である。

さらに新聞出版署は中国児童動画出版発展センターを設立させる予定である。このセンターの役割は、指導と調整、養成工作の強化のほか、専門家を組織して定期的・段階的に児童動画の編集出版に従事する人々に対する訓練を行うことで出版物の質を高めると同時に、調査研究を強化し、動画図書出版の管理を導入して、不健全な内容の出版物や海賊版を断固取り締まることである。

国家新聞出版署署長・于友先、中央宣伝部副部長徐惟誠はそれぞれ座談会で発言し、「5155プロジェクトの実施には、思想を解放し、思考の幅を広げて、大胆に新創造を行うことが必要である。誰もやらなかったことを行い、誰もやらなかった形式を用い、誰も描かなかった内容を描く。さまざまな形態・内容の出版物と不変の価値基準を以て、我々の美しい世界を映し出そう」と述べた。

4. 飛躍が待たれる中国マンガ

『光明日報』2000年6月3日　本紙記者　邢 宇 皓

「先生がどうしてゲームセンターに行ってはいけないと言うのか、以前はわからなかったけれど、この映画を見たらよくわかった」
「ストーリーが単純すぎる。ハラハラドキトキが多いほうがいい、『コナン』みたいに」
「どの人物も似たり寄ったり」
「自分たちの生活にとても近い。ここに出てきた空想は私が実現したいと思うものばかり」
「善人は欠点がないといけないし、悪人は徹底してワルじゃないと」
「人物の誇張が足りない。『スラムダンク』が好き。始めの部分は色が多すぎてちょっとごちゃごちゃしていた」
「六・一」児童節前夜、北京安外三条小学の生徒たちは、口々に彼らがたった今見た国産アニメの感想を述べる一方、その場にいた創作者たちに「アドバイス」することも忘れなかった。幼い話しぶりの中にませた様子がかいま見え、大いに驚かされた。多くの「提案」をもらった創作者たちも別にがっかりした風ではない。国産マンガは子どもたちの要求にはまだ一定の距離があるものの、それでも彼らの心のなかに根を下ろし始めているのは確かだ。

伝統的連環画が「退潮」し、「外国」マンガが大挙して上陸

五六十年代、我が国の伝統的連環画は隆盛を誇っていた。『大鬧天宮』、『岳飛伝』、『三国演義』、『楊家将』、『鉄道遊撃隊』など、皆が愛読したものだ。80年代初、『連環画報』は100万部以上の発行部数を誇っ

ていた。だが、80年代中期以降、テレビがマスメディアとなるにつれ、伝統的連環画は大きな打撃を受け、年間販売量は8億冊から一挙に数百万冊にまで落ちこんだ。ほぼ同じ時期、日本の漫画がテレビの「助太刀」を受けて90年代初に中国市場に登場した。『ドラえもん』、『鉄腕アトム』はいち早く伝統的連環画が退場したあとに形成された「真空地帯」を埋めた。『一休さん』、『聖闘士星矢』、『武太郎』[不詳、誤植の可能性もある――訳者注]、『ドラゴンボール』……巨大な市場に外国漫画が次々になだれ込み、町のすみずみまで溢れかえった。統計によれば1993年から1994年、中国市場における日本マンガの年間販売量は1億冊を突破した。

優秀な外国マンガが中国の子どもたちの視野を広げたが、同時に格調の高くない、ひいては暴力や色情の低級なマンガも大量にやってきた。さらに憂慮されるのは、外国マンガが天下を取ることで、中国の青少年が幼い頃から非本土文化の薫陶を受けることになり、これが長引くとその結果は言をまたないということである。

出版界が力を合わせて難関を攻略　中国マンガの苦しい出発

重い社会的責任と「失地回復」の強烈な要求は、国内出版界、映画・テレビ界に一つの選択しか残さなかった。ここで指摘しておくべきことは、ほとんど空白だった新時期中国マンガが向こうに回していたのは、100年の創作の歴史と数十年の成功した市場運営の経験を持つ日本とアメリカという「巨人」であり、すでに高い鑑賞レベルでスタートしていた国内の読者であるということだ。したがってその出発の際の難度は想像に難くない。

青少年の健全な成長に関連して、党と国の指導者は国産マンガの創作に対し熱心な支持と激励を行った。1995年、江沢民総書記と李鵬総理はそれぞれ上海美術映画制作所と浙江人民美術出版社に書簡を送り、「広範な動画芸術工作者が党の文芸方針の指導のもと、思想性、芸術性、

鑑賞性が高レベルで統一された芸術的逸品を創作し続け、少年・児童のために更に多くの更に優れた精神の糧を提供して、我が国独自の動画のヒーローが少年・児童の手本・友達となるようにしてほしい」と述べた。この二通の書簡の発表が中国マンガ発展の契機の一つとなった。

中国マンガの創作に広い発展の空間と市場を提供するため、関係各部門は図書市場の規範を強化し、国産マンガに対して政策的な保護を行った。1994年、新聞出版署は規定を作って外国マンガの審査許可を強化し、全国の市場に対して集中的な整理と取締を行った。1995年と1996年だけでも処分・没収された各種外来動画読み物は300種以上、4000万冊以上に達し、違反の甚だしい出版社及び販売店11社に対して処分を行い、外来のマンガが氾濫していた局面はコントロールされた。

全国の創作、編集、出版、販売の力を集中し「大きな力とする」ため、1995年末、中国共産党中央宣伝部と新聞出版署は「中国児童動画出版プロジェクト」、略称「5155」プロジェクトを始動させた。これは二三年以内に5つの動画出版基地を建設し、大型児童動画図書シリーズを15組重点的に出版し、動画、マンガ雑誌を5誌創刊して、児童少年向読み物出版事業全体を全面的繁栄に向かわせようとするものである。

「5155」プロジェクトは出版界の積極的な反響を得た。この5年来各出版単位はマンガ創作に多大の人力と財力を投入し、如何に子どもたちが喜ぶマンガの形式を用いて中華文化の特色を受け継ぐかの道を探った。そして一連の中国マンガキャラクターが創り出された。接力出版社の『神脳聡仔』シリーズ、上海少年児童出版社の『三毛大世界』、新蕾出版社の『地球保衛戦』、江蘇少年児童出版社の『丁呱呱シリーズ』などは、文学、歴史、科学普及、SF、童話そして少年思想道徳教育を一つに融合させたもので、子どもたちの評判も良い。

また『中国卡通』、『少年漫画』、『北京卡通』、『漫画大王』、『卡通先鋒』を代表とする動画雑誌もマンガ市場に於いて徐々に定着しつつあり、一群の読者を得ている。併せて創作基地が形成され、一部の高レベル創作

人材の加盟をみた。例えば『少年漫画』などの雑誌は誌面の一部を割いて新人の作品を掲載し、専門家の批評をつけて、若い創作者たちがすみやかに向上できるようにしている。一群の新人はすでに頭角を露し、外国の創作者と競い合える実力を備えた。

「5155」プロジェクトは国内マンガ創作の意欲を高めた。5年の鍛錬を経て中国のマンガ創作はすでに形を成し始めている。

真の拮抗のために更なる突破を

5年前には「中国は『外国』漫画の天下という局面をいつ打破できるのか」という問題しかなかったとすれば、5年の発展を経た今日の中国マンガの創作は、自らの成熟したブランドを作ることができるかどうかという瀬戸際に立っている。

現在国産マンガは外国と比較して明らかな差が存在している。その最も顕著な差は「スター」がいないことである。我々のアニメキャラクターはほとんどが儚い命だ。このため業界の専門家は、中国のスターが外国作品と対等に闘うためには、突破しなければならない点がいくつかあると指摘している。

——作者が「単独で闘」ってはならない。現在、国産マンガの作者の多くは一人か数人で仕事をしており、創作の水準や思考が大いに制限されている。ブランドの創造は一人のインスピレーションでもできるが、長期的に持続させるには集団の知恵を必要とする。

——創作の「難関」の突破が急がれる。現在、国内マンガの低年齢化現象が非常に顕著であり、絶対多数の作品が10歳以下の子ども向け程度である。原因の一つは現在の子どもの受容能力を低く見積もっていることであり、さらに重要なのは、創作の志が高くかつ青春期の少年の心理的ニーズに合致した作品をきちんと把握することが難しいということである。そのため国内マンガはティーンエイジの読者向の創作を「難関」だとしてこれまで意図的に避けてきた。よってマンガ最大の受容者

群は今でも『スラムダンク』など外国マンガに「占拠」されている。

――市場意識を重視せねばならない。外国のアニメスターはふつう、雑誌の連載、単行本の出版、映画化テレビ化という一連の過程を経て最終的にブランドとなり、関連グッズの開発によって市場における最大の利益回収を行う。それぞれの環節において大量の市場調査が必要であり、読者に対する調査を通して今後も継続するかどうかが決定される。だが我が国の出版者の中には市場を前にして何も理解できない人もいる。1996年から1998年にかけて国内のマンガ市場には皆が殺到するという状況が出現した。多くの精力を投入し、力を費やし、多くのキャラクターを創ったにもかかわらず、読者に認められたものは少なかった。

――メディアの連携がいまだに不足している。マンガがあっという間に流行した、その最も大きな原因は、テレビ・映画の力を借りたことである。現在、映画・テレビと出版との間にはかなりの距離があり、それぞれが我が道を行っている状態である。勝手に創作プランを作り資金手配を行っている。これが、巨額投資の映画テレビアニメ創作が比較的投資の小さい出版物で先行市場観測を行えないこと、また優れたマンガキャラクターが映画・テレビの巨大な影響力を借りて局面を打開できないことの原因でもある。

――投資のメカニズムが未形成である。数年前広西の接力出版社が『神脳聡仔』のアニメ制作を独力で行うことを決めた。数年来の累計投資は600万元以上に達し、52回分の制作を終えている。だがブランドの定着には時間がかかり、高額の制作費を投入することに、出版社一社でどれほど持ちこたえられるものだろうか。将来的な収穫は見込めるものの、投資額が大きく、時間が長く、短期的な回収率が低く、市場が展望しにくいため、現在投資可能な人がマンガブランド創造をサポートしようとするとき、ためらいを生じているようである。投資のメカニズムが整わなければ、中国マンガは常に「給餌が途絶える」危険がある。

今日、中国マンガは発展の鍵となる時期を再度迎えている。ハードルを越えることは全体のレベルアップを意味している。中国マンガの振興にはさらに多くの力のサポートが期待される。

卡通片：アニメ

5. 中国のマンガは何がネックなのか

『北京日報』2000年10月18日　楊　鵬

五年前、中国児童図書市場を非常な勢いで蚕食していた日本マンガに対し、中国のマンガ人は大規模な「抗日戦争」を行った。――中国のマンガに発展の空間と市場を作り出すため、関係各部門は政策的に国産マンガを保護した。例えば新聞出版署は輸入するマンガの審査許可を強化し、全国の市場に対して集中的な整理点検や検査没収を行い、中央宣伝部は新聞出版署とともに中国のマンガ事業の繁栄を促進させるため「中国児童動画出版プロジェクト」（略称「5155」プロジェクト）を始動させた。しかし続々と中国市場に流れ込む『スラムダンク』、『名探偵コナン』、『ポケットモンスター』などの日本マンガに比べ、中国のマンガは相変わらず脆弱で層が薄い。中国のマンガはどうなっているのか？何がネックとなっているのだろうか。

中国マンガの通弊は概念化と功利主義

「5155」プロジェクトの始動から、筆者は二大マンガ基地と3組の大型叢書の執筆、そしていくつかのマンガ雑誌の立ち上げにかかわる機会を得た。筆者には、行き過ぎた概念化と功利主義が中国マンガ作品の通弊だと思える。筆者が中心となり「『5つの一』プロジェクト賞」を受賞し

た『地球保衛戦』を例に取れば、この作品は最初から主題先行、概念化の烙印が押されていた。物語の登場人物やストーリーが固まらないうちから出版社側はこれを「環境保護」を題材とする作品とするよう求めた。また執筆の過程でも、物語ごとに一定の比率で非常に生硬な「科学普及知識」が注入され、物語が完成した後も、「この物語は教育的意義を充分に体現しているか」という基準に則ってストーリー展開が手直しされ、加工された。文学創作であれマンガ創作であれ、こういったやり方は真の創作規律に逆行するものである。中国マンガ事業発展の角度から見ても、このような作品は少なければ少ないほどいい。

過去の遺産に頼ることと民族性とは別物

大きな目、細く長い足の日本のマンガキャラクターの横行が、多くの中国マンガ人の民族的自尊心を損なっているのは確かだ。だからこそ、マンガシンポジウムの席上必ず誰かが最も民族性を備えた中国のキャラクターで日本に対抗しようと呼びかける。また日本マンガにも孫悟空、神筆馬良、関羽など、中国古典や神話、伝説中の人物が少なくないことを挙げて、中国マンガは底の厚い中国古代文化を掘り下げること以外に道はないことを証明しようとする人もいる。ちょっと見にはこの説は非常に理にかなっているようだが、実はこれは「過去の遺産に頼る」怠け者の考えであり、古い殻に閉じこもろうとする心理の現れである。日本のマンガを多少でも読んだことのある人は、日本マンガに出てくる中国古典の人物、例えば孫悟空などは本来の形象とは月とすっぽんほどの違いがあることを皆知っている。日本人は羊肉を掲げてイヌの肉を売っているにすぎず、これらの人物の外側だけを利用して、作家自身の独自の個性と創造性を注入し、人物にさらなる現代性やゲームの精神を持たせ、読者の好みに合わせているのだ。グローバル化が進む時代に目先のことしか見ないようでは自滅するだけである。ハリウッドで記録的なヒットを飛ばした『ゴジラ』や『ピカチュウ』、そして『ライオンキング』

などは、すべて日本人のオリジナル作品を下敷きにしている。一方日本マンガの多くのアイデアやキャラクターはアメリカのSF黄金時代の作品にヒントを得ている。過去の遺産に頼ることと民族性とは別物である。中国マンガ事業を本当に発展させ世界水準に引きあげたいのなら、何でも来いの度量や胸襟が必要である。

力を集中しオリジナルを確立することが当面の急務

中国マンガがずっと中国の子どもたちに帰属するキャラクターを産み出せないことを、多くの人が資金の欠乏、スタートの遅れ、技術不足のせいにしている。だが実は、これらは中国マンガが行き詰まった真の原因ではない。筆者の観察では、国内の多くのテレビ局がマンガ映画作品制作の際に投入する全体の資金は日本やアメリカに比して決して少なくないのだ。だが、実際の制作に投入できる資金は、全体の三分の一、五分の一、或いは十分の一にも満たない場合がある。スタートが出遅れたことも、中国マンガが人より劣っている原因とすることはできない。日本マンガは50年代頃に盛んになり、アメリカより半世紀分遅れた。だが日本は5年足らずの時間で子どもたちを魅了するキャラクターや連続ストーリーを生みだした。『鉄腕アトム』がアメリカの市場を開いたのはその三年後だった。マンガにとってスタートが遅いのはむしろ有利なことである。なぜなら他の国の経験を手本とし、無駄な回り道をしないですむからだ。中国の「5155」プロジェクトが始動して5年がたつ。しかしながら効果は当初の予想ほどあがっていない。その原因を探ることが大切である。技術が劣っていること、これは原因の一つだが、主因ではない。アメリカの『ライオンキング』、日本の『ポケットモンスター』など成功したマンガ作品には多くの中国マンガ作画者の汗がつまっている。中国に人材は少なくないのだ。また、中国で現在「成功」しているキャラクターはほとんどがメディアによるパッケージの結果である。中国マンガの制作者たちはメディアの力を過信している。実際はよい作品

はメディアの力を借りなくとも市場を攻め落とすことが可能なのだ。例えば現在でも子どもたちに根強い人気がある『ドラえもん』は、中国に入ってきたとき何の広告もしなかったし、メディアも全く宣伝を行わなかったが、向かうところ敵なしだった。力を集中させてオリジナルを創作すること、やはりこれが中国マンガ事業の当面の急務である。

日本やアメリカのようなマンガの「兄貴分」に比べ、中国マンガは確かにようやくカタコトで話せるようになった「弟」である。だが中国マンガもすでに歩き始めている。そして胡蓉、柴美華、姚非拉など希望にあふれたマンガ作家が登場してきた。中国マンガ作品はまだ幼く、市場も成熟していないが、それでも前途洋々たる右肩上がりの産業である。陳腐な偏見や古くさい思考方法をすっぱりと捨て、胸襟を大きく開いて他の人の優秀な創作思想や経験を吸収すれば、輝かしい明日は必ずやってくる。

6. マンガ　最も取るに足らない芸術

『芸術世界』2001年10期 BENJAMIN

私が文中で大いに並べたてているゴタクは、おそらくほとんどマンガを読まず、「芸術」にのみ興味のある読者の「世界」の外のことだろう。『芸術世界』第3期で陳丹青先生に「有害な芸術」と批判されたが、私の理解によれば、この社会でマンガを読んだことのない多数の人、とりわけ親たちは、「マンガ」は非常に「有害」であり、「芸術」とは言えないと思っている。これでは批評する資格すらないだろう。ここで皆さんに、あなたとは関係ない小文を読むことをささやかな心理テストと見なしていただくようお願いしたい。その目的と結果については本文の最後でご説明するつもりだ。

8月23日から26日まで、上海図書館で上海第2回アニメ・マンガ展覧会が開催された。主催者の上海美術映画制作所は国内の多数のマンガ家や香港の著名な漫画家・黄玉郎（玉皇漫画集団の創始者）、馬栄成（映画『風雲』の原作者）を招き、サイン会を開いて会を盛り上げた。展覧会では商業ブースが30以上、国内のマンガ愛好者サークルのブースが百近く設けられ、一階のマンガ原作展覧会場では香港や内地のマンガ家の作品500点が展示されていた。開催前の宣伝はそれほどちゃんとしておらず、上海中の「美亜音像レンタルチェーン」にポスターを貼り、チケット売り場を設けたのがメインであった。その結果、会期一日目の早朝には当日券はすでに売り切れていた。私は所属する「赤紅漫画」サークルと共に参加したのだが、雨の中、多数のマンガファンがチケットを握って会場のそとに待機しているのを目撃した。というのも会場内が満員となったため、守衛が、一人退場したら一人入れるようにしたからである。結局四日間の会期で10万枚のチケットが売り切れ、会場での売り上げを加算せず、入場料収入だけで50万を超えたという。ささやかなマンガ展がこれほどまでに大きな反響を呼ぶとは、マンガの存在を気にも留めていない人々を大いに不思議がらせた。「へえ？ あの人たちって何なの？」

実のところ、我々のマンガはすでに早くから存在しており、今回のマンガ展の勝利は絶対的必然なのである。私は前回のマンガ展にも参加したが、狭い会場にも拘わらず、チケット販売数3万枚の記録を作った。今回は請け負った人があれこれ手配し、準備期間を長く持ったため、当然成績には見るものがあったわけだ。

興味深い事件といえば、香港のマンガ家・黄玉郎と馬栄成だろう。伝え聞くところでは、二人は昔から仲が悪く、黄玉郎はヤクザを雇って馬栄成の手を落とそうとした。幸い馬栄成は難を逃れ、彼の助手が両手をやられたという。有名になってから二人は行き来していない。真偽のほどは定かではない。だが今回、二人はそれぞれボディガードを従え、座

談会にせよサイン会にせよ、同じ会場であっても別々に登場した。仲が悪いというのは本当のようである。あーあ

馬栄成は国内マンガ家の座談会の席で「中国マンガの特色は何か」と問いかけた。会場はしんとなった。馬はこうも言った。「ご出席の各位は長年マンガを描いておられるのだから、中国マンガの特色をご存じないことはないでしょう」私は軽率にもこう言った。「私たちの時代の人間は第三世界に属しています。先進国の経済水準にあこがれる気持ちこそこの時代の中国の特色でしょう」馬栄成は首を振り納得できないという風に言った。「中国の古典の名著をマンガにすることだよ、キミ」

私は頭に来て馬栄成がくれたTシャツをサークルのブースに掲げてセリにかけてしまったが、ちょうどその時馬栄成が一群を引きつれて通りかかり、Tシャツを指さして何か言った。幸い私はとっとと逃げ出していたので、ばつの悪い思いをせずにすんだ。だが損なわれた人格を取り戻すのは難しいようだ。あーあ

展覧会でのコスプレ（人間がアニメやマンガのキャラクターに扮すること）も盛んだった。バンパイヤ、キョンシー、格闘ゲームキャラ、中国の春麗、セーラームーン、紫式部などが、主催者の禁止もものかは、公然と場内を闊歩し、あたかも無人の境地にあるかのごとくであった。初めて見た人は驚きの声をあげていた。広州のマンガ友達「TNT漫画社」のコスプレは、一着一二千元もするもので、女の子が五人汽車で上海にかけつけご披露に及んだ。玄人はだし、命がけである。カンペキな扮装のTNT美女たちは「赤紅」のブースの前で記念撮影をしたが、我々のカメラ以外にも周囲にいたマンガファンのカメラのフラッシュが一斉にたかれ、無数のフィルムが命を奪われた。

アニメ・マンガ展覧会の状況が良かったということは、我々のマンガの前途が洋々であるということを示すが、我々のオリジナルの現状が良好だということを示しているわけではない。実際はその逆で、我々は現在オリジナルマンガの成型期にあり、自分たちの明確な風格ややり方は

まだ形成されていない。つまり、我々は目下雪山を登り、草原を歩いているところなのだ！

興味のあるみなさんは続けて読んでほしい。以下、この人々に奇妙がられるマンガについて最初から語るつもりである。

マンガとは何か

ここで言うマンガとは、新聞でよく見かける「ユーモア諷刺漫画」とは違い、専ら日本やアメリカから伝えられたストーリーマンガを言う。その実際は、かつて非常に盛んだった我々の「小人書」である。だが我々の「小人書」は没落し、彼らの「小人書」のほうは、B5判の、映画のようにいくつものコマが連続する新「漫画」である。つまり優れたマンガは音のない映画である、ということもできる。よってこの点から言っても新聞やメディアが「国内のマンガ」を語る時、常に王復羊や華君武、丁聡、方成、繆印堂といった「ユーモア諷刺漫画」の大家に発言を求めるのは、物事を知らない誤りである。お願いすべき相手は連環画家の賀友直などであり、彼らこそが我々の直系の同業の先輩なのだ。

「国内マンガ」と言えば、泣くべきか笑うべきか、マンガを読まない人は「マンガ」を「卡通」(cartoon) と言う。これはおそらく1980年代のディズニーアニメの総称の延長だろう。「卡通」とはもともとアニメ映画を指し、マンガは欧米各国では「コミック」(comics)、日本と韓国では「マンガ」と呼ぶ。紙に印刷されたものとAV製品とでは全く違うはずである。だが国内のお年寄り連はそんなことはおかまいなく、子どもだましのものにそれほど心を砕く必要もないと、なんでもかんでも「卡通」と呼ぶのである。その結果、非常におかしなものが生まれてしまった。たとえば、新聞や雑誌に「中国卡通画を評」してああだこうだ、と発言したり、明らかにマンガ雑誌なのに『〇〇卡通』という題名だったり。ここで一つの事実が暴露される。それはこれら「卡通」をこねくりまわしている人たちはマンガについて何も知らないヤツだ！というこ

とだ。これについては後ほど語るが、実際のところcartoonでもcomicsでもmangaでもなく、おとなしく「マンガ」と呼べばいいのだ。それはまずい、「英訳」がいい、「世界と軌を一にする」のがいいというのであれば、わかったふりをせず、「卡通」などとしないでもらいたい。私たちとあちら様の「卡通」とは違うものなのに、皆が私たちのアニメ事業が盛んだなどと思われては困る。

中国マンガの現状

1993年『画書大王』が出版された。これは「本を雑誌とする」非合法出版物で、聞くところによれば毎月30万部の販売数に達したという。日本マンガの海賊版が中心だったが、中国人にも作品発表の場を与えてくれた。『画書大王』から、自由鳥、顔開、姚非拉など第一代の中国マンガ家が生まれたのである。

1995年国は『画書大王』を発禁とし、「5155プロジェクト」の開始に着手してマンガ雑誌を5誌創刊した。これがさきほど言った『〇〇卡通』である。何はともあれマンガの書き手たちはやはりこの5誌のまわりに集まり、第一代の真の中国マンガを創作した。

我々の最初のマンガ編集者は各出版社の公務員であった。彼らは全くマンガを知らないままにマンガ制作に従事したのである。だからマンガを子どもの読み物と曲解するなどやむをえないところがあった。当時はいろいろと回り道もしたが、現在の状況はずっと改善されている。マンガを愛する若者が編集者の隊列に加わり、主導権はもとからいる古い編集者の手中にあるものの、彼らも五六年の経験を積んで、たいていの人はマンガの取り扱い知識を身につけてきている。そして徐々に専門化に向かって邁進している。

だが中国のオリジナルマンガの影響力は相変わらず哀れなものだ。「5155」プロジェクトの雑誌5誌のうち、今でも4誌が発行部数2万以下である。5155プロジェクトに属していないマンガ雑誌のほうは数万の

発行部数があれば上等で、7万を超えることはない。

中国オリジナルマンガは基本的に日本マンガの模倣の上に成り立っている。そして中国では次第に地域的特徴を持つようになってきた。

1 北京：少年マンガに偏っている。作者群及び読者群は男性が多く、画風は比較的古い。雑誌の方針も比較的保守的である。ときたま異種が混じっていることがあり、画風は異なるが、意識としては男性的である。

2 上海：典型的な少女マンガで、作者も読者も圧倒的に女性である。マーケット的感覚に優れ、整って画一的であり、作者と読者の好みの溝が比較的小さい。マーケットの反応も非常に良好である。おそらく目下最も成功しているマンガ基地といえば上海であろう。だがここには異種の画風はまず生存の余地がない。「特色」のあるマンガを探すのはおそらく困難である。

3 成都：規模はぐっと小さくなり、広東・広西に近いため少々香港マンガの影響を受けているが、異種のマンガ家や少女マンガ家がいて風格はかなり多様化している。

いわゆる北京、上海の二大派閥、これもおなじみの図式だ。

漫画家は全国に数十人ほどしかいない。雑誌の比較的多い北京、上海、成都に集中しており、年齢は18～28歳の間である。プロはおそらく半分強であろう、ほどんどが定収入で、学歴も同様に高くない。

中国のマンガ家たち

最初の数年間は中国マンガの核心は北京にあった。なぜなら5誌しかないマンガ雑誌のうち4誌が北京にあったからである。そこでマンガを愛する人はみな同じ理想のため全国各地から熱狂的に北京をめざしてきた。

1996年、私はあるペンクラブの会場で姚非拉と知り合った。当時彼は私と同様学校を卒業したばかりだった。武漢大学コンピュータ学部。

湖北のやさ男、メガネをかけ、私と同じく卒業と同時に汽車に乗って北京へ出てきたのだ。違うところは、私が出稼ぎ労働者だったのに、彼は首都鋼鉄公司で技術員をしながらマンガを描いていたことだ。彼は中国で最初の、武闘を扱わず感情や生活のユーモアを扱うマンガ家である。そしてほとんど初の成功者である。あ～！ついでに言うとこいつは典型的な9番目の鼻つまみ者気質だ。

姚非拉はこの世界ではめずらしく順調にいったうちの一人だろう。これは天賦の聡明さによるところが大きい。そうだ、私はきちんとそう評価するぞ！ 彼のユーモアの細胞は脳細胞と同じくらい多く、普段はガチガチ人間なのに、マンガを描き始めるとがらりと変わる。1996年とは、マンガを描きたいと思うすべての子どもが両親とケンカをし、「財政会計」だのを学ばず、北京に行って「マンガを描く」、「家出」ゲームをしていた頃だ。姚非拉は学位を取り、楽な仕事と生活の糧をみつけ、ガールフレンドをみつけ、安定した雑誌に長編マンガを連載して、好評につき「まもなく単行本が出るだろう」。国産マンガ家としてやるべきこと1はすべてやり、手にいれるべきものはすべて手に入れた。その頃私たちその他の人間は、一方で仕事を探し回り、朝飯にありつけば夕飯はなく、もう一方で自分が苦労して描いた駄作を編集者が紙飛行機にしたりくずかごに投げ入れたりするのを見ていた。私たちは姚非拉を死ぬほどうらやましがり、自らの模範、成功の手本と考えていた。

同じペンクラブで、少女マンガを描く柴美華と少年マンガの李詩鵬とも知り合った。柴美華は私より背が高く、まさに花の盛りの少女で、画風はしっかりしており、リアリズムの手法は日本人にも負けていない。李詩鵬は熱血格闘マンガを描き、当時はアメリカンコミックの味わいに近かった。めずらしかったし人気もあった。二人はマンガを連載中であった。

私は同じく芽がでなかった陳熙と張彤を良き仲間だと見なしていた。張彤はロックンロールベイビータイプのマンガを描いた。内容はおむ

つをつけている子どもなのに頭の中はロックンロールでいっぱい、というもの。私は彼のこういった風格のマンガは非常に前途有望だと思っていたが、1996年の時点では少々早すぎた。まだ開けていなかったマンガ雑誌から排斥されてしまった。仲間の陳熙は、中国の最も早い美術編集者だと言えるが、マンガが大好きなため編集の仕事がついついおろそかになる。私たちはいつも集まっては酒を飲み、マンガを語り、女の子の話をする。姚非拉を痛めつけてやろうと計画したこともあったっけ。ねたましかったのさ、ははは！だが酔いが醒めたらその計画は取り消しになった。なぜなら我々の現状にプラスにならないのがハッキリしていたから。

北京のマンガ家たちには絶対服従の大姉御がいる。それは胡蓉である。彼女は最初に中国画の「工筆」技法でマンガを描いた偉人であり、最初にマンガの単行本『聶小倩』を出した人だ。右足が小児麻痺で、身体に障害はあるが意志は強固である。私たちより一二歳年上で、夫と蘋果園に家を借りて住んでいた。マンガ家の仲で最も広い客間を持っていた人だ。20平米はあるだろう。我々北京のマンガ家たちは何かにつけ蘋果園の彼女の家に集まり、企画の相談をしたり、ご飯にありついたりした。確かに我々はそれぞれに個性があるが、全体としては胡蓉の指導権を承認していた。彼女は我々の心の核心なのだ。外地から北京に出てきたマンガ人は住処をみつけるまで、まず彼女の家の床で寝る。アシスタントだった1メートル92もある「雪狼」ものちに独立した。

姚非拉は97年に蘋果園に引っ越し、同じ年私も引っ越してきた。加えて有象無象のアニメーターやマンガ家がいて、胡蓉家の周囲はあたかも超小型の画家部落の観を呈していた。だがこれまでと変わらず、胡蓉の家に集まる以外はほぼつきあいがなかった。一度姚非拉の家に行ったことがあるが、なんと、家の中は散らかり放題、アシスタントが二人、必死で仕事をしていた。唯一の家財と言えるものは、ボロベッド一つと山をなすマンガであった。これが北京のばか高い家賃に締め上げられた

マンガ家の生活である。まあいい、マンガを描くものには夢だけはたっぷりある。姚非拉が私のマンガに同感の意を示したのを聞くと、追い払われたかのように人がいなくなった。

深圳で少年マンガを描いている顔開と上海で少女マンガを描いている自由鳥をずっと崇拝している。二人とも非常に看板の大きな有名なマンガ家だ。それは今日まで変わらない。顔開は1995年の『画書大王』に『雪耶』を連載し今日に至っている。これまでに連載される雑誌は数回変わったが、名声は鳴り響いている。画風的には日本の北条司を手本としているが、それよりもっと美しい。典型的な少年マンガの題材で、内向的な少年のもとに突然天から林黛玉が落ちてきた、といった類の、格闘と青春と純潔な愛情を描く。彼はずっと唯一の作品『雪耶』を書き続けており、私はすべての雑誌を買いあさって彼の『雪耶』を収集している。自由鳥は当時『飛雪飛雪』を描いていた。初期は高橋留美子に似ていたが、すぐに独自の風格を手に入れた。――邪気のある少女マンガ。多産のマンガ家で作品は無数にある。自分の処女作である8頁の短編が『飛雪飛雪』と同じ雑誌に載ったときの嬉しさといったら。

1997年はあっという間に過ぎ去り、仲間の身にもいくつかの大きな変化がおこった。

一、物価が上がり、人々の給料も上がったが、原稿料は上がらず、1頁40～100元の水準を維持している。しかも最低半年待たねばもらえない。こうなると我々チンピラは言うまでもなく、姚非拉のように「高い原稿料」を「毎月」もらえるマンガ家の生活にも問題が出てくる。蘋果園の家賃は相変わらず高い。姚非拉はあっさり郊外に引っ越していった。私はもっと徹底していた。マンガをやめて広告に鞍替えした。まずは金儲けだ。

二、少年マンガは人気を失い、少女マンガが伸びてきた。そこで少年マンガ家たちがすぐさま見捨てられた。友達の李詩鵬のマンガは発表の場がなくなり、しばらく家にいたが、そのあと私と一緒に広告を始め

た。少女マンガも「さらに少女的」になるよう求められた。柴美華のマンガは「黒すぎる」（ベタの使い方が多いという意味。「新少女」マンガはさっぱりときれいな画面を貴ぶ）と言われて、これも発表の場がなくなった。張彤はすでに長いこと作品を発表できず、ついに我慢できずにロックバンドに走ってしまった。上海や四川では多くの「新少女マンガ」の作者が登場した。マンガが熱いのは北京だけではなくなり、上海や成都でも自分たちの雑誌（「5155」プロジェクト以外の）と作者群が参入してきた。

三、第一期の単行本（林意非、自由鳥、鄭旭声、顔開、柴美華）は思うような市場の反応を得られず、出版業者が自信を失い、その後今日まで単行本は出版されていない。

以上を総合して、北京の人々は甘い夢から突然覚めたかのようだった。マンガとはかくも残酷なものなのか！マンガ家とはかくもちっぽけなものなのか！我々の影響力とはかくも微々たるものなのか！我々の読者はかくも少数なのか！我々の水準はかくも低いのか！

胡蓉が一番にいくつかの問題に見切りをつけたようだった。そこで方向転換して日本に行ってしまった。私は天津に使い手たちがいるのをみつけ、荷物をまとめて天津に修業にでかけた。胡蓉を失った客間では、蘋果園の画家たちがあっという間にちりぢりになってしまった。さらば胡蓉大姐、さらば！ それ以降核心を失った北京のマンガ家たちは、さらば、我が世代のマンガ人たちよ！ とも言わねばならなかったかもしれない。

1999年、私は天津で食えなくなり、北京に舞い戻ってきた。一年見なかったが北京の変化はあまりなく、少女マンガは当然大流行、ただ姚非拉は郊外からさらに遠くの〇〇県に引っ越していた。一歩門を出ると畑、といった場所である。だがさらに有名になっていた。なぜなら知恵にあふれた彼の生活マンガはどんな少女にも好まれたからだ。私の留守にも〇〇公司に奉られ、しばらくの間「契約画手」となっていた。この

名を聞くと、天津弁で「なんで画手と言うんじゃ！」と言ってしまう。彼はその結果、ますます貧しくなったようだ。

柴美華はあちこちで広告の仕事を取ってがんばっていたが、我が李詩鵬大人は、怒鳴り散らしながら広告の仕事を一切断り、家にこもって3D動画を研究し、3Dのマンガの試作をしていた。まともなマンガ的感覚をあまりにもそっくり真似たがために、3Dだということがほとんど分からず、その結果、発表してもほとんど反響がなかった。もちろん「少年マンガ」を発表するのはほとんど難しくなっており、新たに登場した若者たちは「英米モノマネ」の方面では彼よりずっと上手だった。陳熙はあるインターネットサイトのアートディレクターに納まっていた。ヤツは我々の仲間では最も優秀のようだ。ところがこいつはやはりマンガを描きたいと、突然私立高校のマンガ教師になってしまった。給料は1000元ちょっと。我々の素寒貧仲間に逆戻りだ。その後私は栄非と知り合った。このかつてのマンガ家は、今は国子監でマンガグッズの店を開いている。まだ新しいものなのでよちよち歩きである。8平米くらいか、それに満たないくらいかもしれない。マンガ用品やマンガの文房具などを売っていて、将来に希望を託している。

この時期の北京のマンガ原画展、北京卡通博物館開館展はどちらもがっかりさせられるものだった。卡通博物館（この名前を聞くと、どうして動画漫画博物館と呼ばないで外来語を使わなければいけないのか、と思ってしまう）のオープン当日に会場にやってきた読者の数は、誇張ではなく、そこにいたマンガ家の数より少なかった。

北京でへこまされ、失望した私は上海に行き、すぐこの雨の多い街に腰を落ち着けることにした。なぜなら開催されたばかりの上海動画漫画展はチケットが3万枚も売れたのだ。へっ、卡通博物館ならその数に達するまで何年もかかるだろう。

上海には「新少女マンガ」のマンガ家が大勢いる。自由鳥、蒋健韋、嘉瑤、楊穎紅、湯蔚清、雪翎など。男は一人もいない。もちろん今はこ

う付け加えなければならないが。「俺以外には！」

性別が違っても孤立感はない。この都市の国際性は北京で常に感じていた抑圧感を吹き飛ばしてくれる。上海には胡蓉はいないが、中国で最もやり手の女性たちがいる。自由鳥と蔣健韋はその典型であり、彼女たちがいつも集会を手配する。上海に来たばかりの頃は毎日のように自由鳥たちとディスコやバーに出かけた。南京路のカフェバーは私たちの行きつけだ。マンガを語り、雑誌にどう対処するか相談する。胡蓉が日本に行ってしまったあと、我々北京のマンガ家がやったことは酒を飲むか大騒ぎするかだった。ボートピープルと何等変わらない。もちろんすぐにまともな生活に戻ったが。自由鳥は国家電力局の正規の従業員であり、共産党青年団党委員会の責任者である。華麗かつ驚くべき数量の作品は彼女の余技なのである。感服のほかはない。蔣健韋は日本のマンガグッズ会社に勤めている。嘉瑤、楊穎紅はプロのマンガ家で各種マンガ雑誌に連載している。だが彼女たちの創作のスピードでは生活を維持するのに問題がある。

何もすることのない時期を経て私は香港のマンガ会社に吸収されマンガの契約主筆となった。それまで姚非拉同志の事実があったので私は「契約」の類を死ぬほど恐れていた。だから仮契約だけして、7カ月後に上海の会社が解散するまで正式な契約にサインしなかった。前の会社の一部の人は深圳で新たに仕事を興したが、私は怖じ気づいて上海に残った。やはり自分の意志でマンガを描こう。

姚非拉の『夢裏人』が中央テレビ局でアニメになり、目下制作中である。だがこの栄誉も彼をますます頑なにさせたほか、彼の貧困を救うことはなかった。

これが中国のマンガ家というちっぽけな一群の興味深い現状である。

中国の特色

馬栄成氏の問題に戻ろう。中国の特色を持つマンガとは何か。あの日

の私の答えは確かに国の品格を失していた。だが中国の特色の解決は、古典をテーマに書くことといった単純なものではないことは間違いない。日本のマンガの多くも中国の名作古典に題材を取っているが、やはり典型的な日本マンガである。例えば斉白石が「源氏物語」を描いても、きっと中国の特色が出るに違いない。同じく日本にも中国画を使ってマンガを描く皇なつき女史がいる。だからといって彼女の作品に中国の特色があるかというとそうとは思えない。彼女の筆になる人物はどう見たって日本人である。

中国マンガが振るわない原因の一部に、親たちの日本マンガに対する抵抗があり、それによって日本を手本とする国産オリジナル作品までも社会に認められないということになっている。また古い連環画よ戻って来い！と大声で呼ばわる人々もいる。編集者がマンガ家に「日本風」を捨て「香港風」、「アメリカ風」をまねるよう要求することもしばしばだ。とにかく日本マンガを真似さえしなければ、どの国のマンガを真似ても「特色」になると言わんばかりだ。

だが実はそれほど興奮し、民族の誇りをふりかざす必要もない。日本マンガの優れた点を分析することが先だろう。まず昔の連環画はすでに淘汰されたものであり、現代社会のニーズには合わない。我々は自分たちのファーストフード文化を持たねばならないのだ。日本マンガはアメリカンコミックに比べ、中国文化により近い。日本マンガの基礎の上に中国の特色を持つマンガを発展させるのは比較的可能である。矛を捨て鉄砲を持たなければ今日の人民解放軍がありえなかったのと同様である。

どんな芸術的特色も、それが現れる前にはそれを手本と決めることはできない。我々の中国画を、これが将来のマンガの中国的特色だというのはおかしな話だ。せいぜいそれはこれまでの中国的特色だと言えるだけであり、しかも沢山ある特色のうちの一つに過ぎない。さもなくば中国画がまだ形になる前のご先祖さまはどうしたらいいのだ？ 彼らはか

くも正直に自分たちの生活のすべてを、血を以て洞窟の壁に描いたではないか。

以下では我々のマンガを弁護するのはやめにしよう。中には確かにビンタをくらうに値するマンガもあるのだ。

マンガは最も現代感覚を持つ芸術であり、その直接的役割は最も簡単で分かりやすい方法で人々に思想を語るということだ。よってマンガは思想を持つべきであろう。でないと人をミスリードする。原稿料だの女だの車だののことしか考えないのなら、別の仕事をした方がいい。マンガは決してキミを満たしてくれないし、キミもマンガを満たすことはできない。

私がやりとげたいのは、中国の我々くらいの年代の人間の特徴を誇張して描くことである。毎日世界を見、情報で頭はバクハツし、事務所ビルに出勤して、路地の家で眠り、外国小説を読み、英語の歌を歌い、恋人と方言でケンカする！ 田舎者を見下すくせに、常に自分たちが第三世界の国だということが頭から離れず、外国人の視線を気にする。こんな感じを描ければそれでいい。日本マンガに似ているかいないか、そんなことは構っちゃいない！

OK、文章は書き終わった。では冒頭のテストの解答をお知らせしよう。

1 キミは本当に意志の強いヤツだ。このつまらない文章を最後まで読んだなんて。私自身ですらたまらないのに！

2 もしあなたがアーティストで、これまでマンガを見たことがなく、でもこの文章を読み終えることができたのであれば、それはあなたが新しい物に好奇心を持ち、優れた感受性を持つ人材だということを示している。あなたはきっと芸術の先端を行き、新しいものを創造することができるだろう。マジで！